

母親の「子どもの心に目を向ける傾向」の発達的变化について

一生後5年間に亘る縦断的検討—

(中間報告)

京都大学大学院教育学研究科 篠原郁子

Stability in Maternal Tendency to Focus on Child's Mental World; From 1st to 5th Year of Life (A Progress Report)

Graduate School of Education Kyoto University SHINOHARA, Ikuko

要 約

本研究は、母親が子ども自身の心的世界に焦点化し、子どもの身体的・行動的側面よりも、感情や思考といった心的経験に注目しながら子どもを理解しようとする傾向について検討するものである。特に、子どもの心の状態に目を向ける傾向が母親の個人内で安定して見られるものなのか、あるいは子どもの成長に伴い変化するのかを明らかにするため、生後1年目から5年目に亘る縦断的検討を目的とした。母親のこうした傾向として mind-mindedness と insightfulness の両概念に着目し、二時点における比較検討を試みた。この中間報告では、子どもが生後6ヵ月時に測定された母親のMMと、子どもが4歳時に面接で捉えられた母親の insightfulness の関連について、現在までに得られたデータに基づく探索的分析の結果を報告し、今後の研究方針と分析計画を示した。

【キー・ワード】 子どもの心的世界, 母子相互交渉, 縦断研究, 個人差

Abstract

This study examined the stability in maternal tendency to focus on a child's mental world. The continuity and discontinuity of this maternal character between the 1st to 5th year of life were tested. When the infant was 6 months old, the 1st experiment was conducted with mothers to assess their tendency to read the infant's mental experiences. These mothers were followed up and the 2nd assessment was held when their child became 4 years old. This progress report showed the tentative results on the stability in maternal way of viewing the child's internal world. The possibility of the change in maternal tendency along with child's development was discussed.

【Key Words】 Maternal view of child's mental world, mother-infant interaction, longitudinal study, individual difference

問題と目的

子ども達の心の理解発達に関して、例えば「心の理論」(人の行動を信念や欲求など心的状態に基づき予測する能力)は4~5歳頃に獲得されることが報告されている。しかし、心の理解発達には子どもによって広範な個人差があり、現在、その個人差の規定因、即ち心の理解の促進因(あるいは阻害因)を探る研究が注目されている。中でも、子どもを取り巻く社会的環境として、家族や養育者との関係に着目した研究が行われ、特に、家庭における心の状態についての会話の豊富さが、子どもの発達を促進している可能性が指摘されている(Bartsch&Estes, 1996; Repacholi&Slaughter, 2003)。これに関してある研究者は、子どもの心についての会話を行いやすい養育者はそもそも、子どもの発達早期から、子どもの心的世界に目を向けやすいという特徴を高く有しているのではないかと論じている(Meins, 1997)。そして、生後間もない乳児をも既に豊かな心の世界を持つと見なし、心的観点から子どもに関わろうとする養育者の傾向は mind-mindedness (以下 MM と略記) と名付けられた。その後の実証研究から、乳児が生後6ヵ月時にこのMMを高く有していた母親の子どもは、4~5歳時において心の理論課題に優れた成績を示すことが見出されている(Meins, Fernyhough, Wainwright, Clark-Carter, DasDupta, Fradley, & Tuckey, 2003)。こうした結果から、MMは子どもの心の理解発達の促進因として大きな注目を集めている。

しかし、MMに関する検討は開始されて間もなく、乳児期早期に測定されたMMが、その後子どもが4~5歳になるまでの年月の間、如何なる作用を子どもに及ぼしているのかというメカニズムについては不明な点も多い。特に、乳児期に測定された母親のMMに見られる高低といった個人差が、その後の子どもの成長という時間軸の中で安定して認められるのかは検討されていない。心の理解の発達を、乳児期から漸次的に進むプロセスであると考えれば、その期間における被養育環境の特質を探ることは重要な研究課題であろう。したがって、養育者の特徴をある一時点で捉えるに留まらず、その特徴の持続性あるいは可変性を慎重に問う必要があると考えられる。MMは、実際には大人が想像する程には複雑な心的状態を有していないかもしれない幼い乳児にも、心の状態へ焦点化した関わりを持つようとする養育者の傾向であるが、幼児期に至り、子どもが実際にある程度複雑な心的見解を持ち始めた以降も、子どもの心的世界への目の向けやすさという特徴の高低は母親の中で連続しうるのだろうか。あるいは子どもの生後早期に測定された各母親の特徴は、時間を経る中で大きな可変性を持つものなのであろうか。さらに、母親間の差異は子どもが未だ幼い発達早期においてのみ顕著であり、その後子どもの成長に伴い縮小していくのではないかという可能性も考えられる。そこで本研究では、こうした問いを検討することを目的とし、篠原(2006)において子どもが生後6ヵ月時にMMを測定された母親を追跡調査し、子どもが4歳時点における、子どもの心的世界への焦点化のしやすさについての調査を行うものとする。

母親が有する「子どもの心の世界に目を向ける傾向」の測定に関して、篠原(2006)はMMの個人差を捉えるために、母親に自分の子どもではない乳児の映像刺激を呈示し、刺激中の乳児に感情や欲求、思考といった何らかの心的状態の存在を想定する頻度を計量している。そして、6ヵ月児の母親38名を対象としたMM測定の結果から、5つの共通刺激に対する心的帰属の回数には、母親間で相対

的に大きなばらつき（平均 9.05 回，SD:3.52，レンジ 2-20 回）が見られたことが報告されている（篠原，2006）。本研究では，子どもの生後 1 年目に捉えられたこうした母親の特徴について時間的安定性（可変性）を検討すべく，子どもが 4 歳になった時点で，母親による自分の子どもの心的世界への焦点化のしやすさとの関連を問うこととしたい。そこで，具体的には Oppenheim&Koren-Karie（2002）により提唱された母親の「洞察性（Insightfulness）」という概念に着目し，この測定（Insightfulness Assessment，以下 IA と略記）を行いたいと考える。Insightfulness とは，子どもについて語る際，子どもの視点から物事を見て，子どもの行動の動機，すなわち行動そのものではなくその背景となる子どもの心の状態，感情や思考などに触れながら洞察するという傾向を指している。母子の相互交渉場面の映像を見ながら子どもについてのインタビューに答えるという IA への反応に基づき Insightfulness には 3 つのタイプが定義されている。1 つ目は Positive Insightfulness（PI）で，子どもの心的状態や動機を理解しようとする開かれた姿勢で子どもを受容的にとらえようとするものである。残る 2 つは洞察性に欠けるもので，子どもの心的状態よりも母親自身の持つ考えや先入観，関心のほうに注意が偏る One-Sided（Os）と呼ばれるタイプと，そもそも子どもの心の世界に目を向けない，子どもの感情や思考について考えることに困難を示す Disengaged（De）と呼ばれるタイプが見出されている。

生後 1 年目に測定された MM の高さが母親内で時間的に安定しているのであれば，生後 5 年目における IA においても，母親は子どもなりの思考や感情に豊かに触れながら子どもについて語る人が多いと考えられ，MM の高さは PI タイプと関連することが予想される。一方，MM 測定実験で乳児の心的状態に言及することが少なかった母親は，IA においても子どもの心的世界に触れることなく子どもの行動を説明することが多い De タイプと関連しているだろう。ただし，時間軸上で母親の特徴に変化が生じている可能性も否定できまい。また，Os タイプが MM とどのような関連にあるのか，予測は容易ではないが興味深い問いであると考えられる。生後 1 年目における MM 測定と，生後 5 年目の IA の結果の関連を問うことにより，MM が乳児期以降の母親の特徴にも安定的に引き継がれ，子どもの心に焦点化するという養育環境の特徴に一貫性・連続性が見られるのか，あるいはより変化の可能性が開かれているのか，新たな知見を得たいと考える。

なお，この中間報告では，現在までに分析が終了した少数のケースを対象に，現時点での結果について報告する。これらのケースは，MM 測定に参加した母親の中で，特に MM が高い群と，低い群にそれぞれ分類される特徴を有しているものである。子どもが生後 6 ヶ月時に行われた MM 測定においてより特徴的な回答パターンを示したケースを対象に，少数ではあるが，後の IA との関連について報告を行う。

方 法

研究協力者

4 歳児とその母親 7 組。子どもについて女兒 4 名，男児 3 名，平均月齢は 50 ヶ月 1 日（レンジ 48 ヶ月 11 日～53 ヶ月 26 日）であった。母親の平均年齢は 37 歳 4 ヶ月（レンジ 29 歳～44 歳）であつ

た。なお、これらの母子は子どもが生後 6 ヶ月時に実施された篠原 (2006) における MM 測定実験への協力者である。この中間報告では、MM と insightfulness の関連について探索的分析を行うことを企図し、MM 測定において特に高得点を示した母親と、得点が低かった母親を抽出して分析対象とした。なお、その他の母子組についても現在、追跡調査によるデータ収集を実施中である。

手続き

研究者が各家庭を訪問し、Insightfulness Assessment (Oppenheim&Koren-Karie, 2002;2004) を実施した¹⁾。IA では、質的に異なる 3 つの場面における子ども (及び母親と子どもの関わり) の様子を捉えたビデオ映像を使いながら母親を対象に半構造化インタビューを実施する。そこでビデオ映像を得るために、研究者と子どもの遊び場面として動物の人形を用いたお誕生日会ごっこの様子を 5 分間撮影した。次に、母子による遊び場面 2 種類のビデオ撮影を実施した。内容は、小さなボールを運ぶゲームと、ネコの家族の人形を使ったお話作りであり、撮影時間はそれぞれ 10~15 分であった。撮影終了後、母親を対象にインタビューを行った。インタビューでは、先に撮影したビデオ 3 種を数分ずつ呈示され、それぞれに関して、呈示された場面における子どもの感情や思考、動機、母親自身が感じたことなどについて質問が行われた。インタビューの平均実施時間は 61 分 19 秒 (レンジ 42 分 55 秒~80 分 50 秒) であった。

分析方法

全てのインタビューについて逐語録を作成し Insightfulness のタイプ分類を行った。なお、インタビューのコーディングにあたっては、各母親の MM 測定結果が特定できないよう工夫を行った。Insightfulness のタイプの分類について、その基準となる下位尺度が設定されている。インタビューにおける子ども (および子どもと母親自身の関係) についての語り方の特徴を捉えるための 10 の下位尺度と内容は以下の通りである。A 洞察性—子どもの行動の背景にある動機、思考、感情について理解しようとする、B 受容—子どもの行動や動機を受け入れ、子どもの示す困難な行動についても理解し受容しようとする、C 複雑性—良い面も難しい面も含めて、子どもの全体的な人間味が伝わるように語る、D 子どもへの焦点化—語りの焦点を子どもに保ち、母親自身や他の関心ごとに話題が逸脱しない、E 一貫性—インタビュー全体に亘り、矛盾なく一貫した形で子どもの全体像を語る、F 開放性—ビデオを見ることに開かれた姿勢を持ち、子どもについての既存の見方とビデオから新たに得られた情報を比較し、子どもについて新しい気付きを得る、G 怒りと敵意—子どもに対して、怒りや敵意を向ける (逆転項目)、H 心配—子どもの能力や母親としての自分について強い心配を示す (逆転項目)、I 子どもと自分の分離—子どもを独立した一人の人間と見なし、母親とは異なる要求や願望を持つ存在であると考え、J 語りの豊かさ—子どもについての問いに鮮明で分かりやすい形で十分な回答を示す。これらの下位尺度についてそれぞれ 1 点から 9 点までの得点化を行った。なお、PI に分類されるためには、特に「複雑性」「洞察性」「受容」「開放性」において高い得点を得ることが必要となる。下位尺度別の得点の偏りに基づき、先述のような 3 つの Insightfulness のタイプ (Positive Insightfulness : PI/One-sided : Os/Disengaged : De) への分類を行った²⁾。

結 果

まず、子どもが生後6ヵ月時に篠原(2006)により実施されたMM測定実験の結果を参考に、5つの乳児刺激へ心的帰属を行った回数(MM得点)の高低を基準とし、母親をMM高群と低群に分類した。本報告書の対象となる7名の母親のうち、4名が高群に分類され、MM得点の平均は13.75(SD:2.22, レンジ16-11)であった。一方、3名の母親が低群に分類され、MM得点の平均は3.33(SD:1.15, レンジ2-4)であった。

MM得点の高低と、IAによるInsightfulnessのタイプ分類の関係について、表1に示す。MM高群の母親4名のうち、2名が子どもの心的状態に目を向け、感情や思考について触れながら子どもを理解しようとするPIに分類された。MM高群の残る2名は0sに分類された。次に、MM低群の3名の母親について、1名は0sであり、語りの内容に偏りは見られるものの、子どもの心的経験についてそれなりの量をとまう回答を示した。ただし、MM低群の母親2名は、他の母親に比べて子どもの感情や思考について考えるということ自体に困難を示しやすく、インタビューへの回答が短く限定的であり、Deに分類された。

表1 母親のMM(生後6ヵ月時)とInsightfulnessタイプ(生後48ヵ月時)の結果

Insightfulness タイプ	MM 高群	MM 低群	全体
Positive Insightfulness	2	0	2
One-sided	2	1	3
Disengaged	0	2	1

注) セル内の数字は母親の人数を表す。

考察と今後の研究計画

MMとInsightfulnessの関連について、小サンプルに基づく分析結果ではあるが、MMが高い母親にPIが見られ、MM得点が低かった母親にはPIが見られなかった。さらに、MM低群の母親にDeが多く、一方、MM高群にはDeに分類される母親は見られなかった。本研究のサンプルサイズは決して大きくはないものだが、これらの結果は、子どもが生後6ヵ月時に測定された母親の「子どもの心に目をむける傾向」が、子どもが4歳になった時点でもある程度母親内で一貫して認められることを支持していると考えられた。ただし、同時に注目される結果は、MMの高群にも低群にも、0sに分類される母親が存在することである。実は、生後6ヵ月時に行われたMM測定実験では、母親が乳児の言動にどのくらい豊富に心的状態の存在を想定するか、という量的な豊富さに見られる個人差を抽出するものであった。一方、今回新たに測定を行ったinsightfulnessでは、子どもの行動の背景にある動機や思考、感情に目を向けながら子どもを理解しようとする姿勢が問われ、そこには単純な量的豊富さのみならず、母親自身の考えと子どもの心の状態を分離し、子どもの視点から物事をとらえ、子どもの姿を受容するという複数の要素が加わったものである。したがって、MM測定実験で非常に多くの心

的状态を乳児に読みこんだ母親でも、IAにおける語りの中で量的には豊富に子どもの心的経験に触れるのだが、その内容が固定的で同じ動機を繰り返すことで子どもの行動を説明しようとする、あるいは、子どもよりも母親自身の思考が中心に語られるといったケースがあることが見出された。

これまでの分析結果を受け、今後の研究ではまず、サンプル数を増やししながら、MMとInsightfulnessの関連について検討を進めることが重要であると考え。また、今回得られた結果に基づき、MMの高低にかかわらず0sに分類されるケースがある程度の数以上に認められるのか、また、0sの中でも、MMの高低によってより細かな点で語りの特徴に差異が認められるのかについても問いたいと考える。そのために、IAにおける具体的な語りに着目した検討を行うことも必要であろう。今後引き続き子どもが4歳時点でのIAを実施し、これらの研究課題について検討を進めたいと考える。

脚 注

¹⁾ Insightfulness Assessmentの実施について、筆者は2006年7月にIAの開発者らが実施したワークショップに参加し、IAの実施手続きとインタビューデータのコーディングに関するトレーニングを受けた。

²⁾ IAにおける語りの第4のタイプとして、Mixed(Mx)と呼ばれるものが設定されている。これは、インタビュー中における母親の語り方の特徴が一貫せず、0sやDeなどの複数の特徴が混在し、タイプの特定が難しい場合にのみ使用されるものである。なお、本研究の分析対象からはMxは見出されなかった。

引用文献

- Bartsch, K., & Estes, D. (1996). Individual differences in children's developing theory of mind and implications for metacognition. *Learning and individual differences*, **8**, 281-304.
- Meins, E. (1997). *Security of attachment and the social development of cognition*. East Sussex: Psychology Press.
- Meins, E., Fernyhough, C., Wainwright, R., Clark-Carter, D., DasGupta, M., Fradley, E., & Tuckey, M. (2003). Pathways to understanding mind: Construct validity and predictive validity of maternal mind-mindedness. *Child Development*, **74**, 1194-1211.
- Oppenheim, D., & Koren-Karie, N. (2002). Mothers' insightfulness regarding their children's internal world: The capacity underlying secure child-mother relationships. *Infant mental health journal*, **23**(6), 593-605.
- Oppenheim, D., & Koren-Karie, N. (2004). The insightfulness assessment coding manual (1.1). Unpublished Manual.

Repacholi, B. & Slaughter, V. (2003). *Individual differences in theory of mind: Implications for typical and atypical development*. New York: Psychology Press.

篠原郁子. (2006). 乳児を持つ母親における mind-mindedness 測定方法の開発—母子相互作用との関連を含めて. *心理学研究*. **77(3)**, 244-252.

